

試験研究成果普及情報

部門	野 菜	対象	普 及
課題名：セル成型苗利用のキャベツ秋まき春どり栽培における定植直後培土による生存率向上			
<p>[要約] 秋播き春どりキャベツ栽培において、セル成型苗の定植直後に培土を行うことにより、生存率が向上する。定植直後の培土の効果は、普通植えで著しいが、深植えとの組み合わせが最も優れる。球重は培土区と無培土区で大差ないが、生存率の高い培土区が増収する。</p>			
<p>キーワード (専門区分) 栽培 (研究対象) 野菜類 - キャベツ (フリーワード) 春キャベツ セル成型苗 定植直後 培土 生存率</p>			
<p>実施機関名(主査) 農業総合研究センター北総園芸研究所東総野菜研究室 (協力機関) 農業総合研究センター生産技術部生産工学研究室 神奈川県農業総合研究所、(独)中央農業総合研究センター (実施期間) 2001年度～2003年度</p>			

[目的及び背景]

春キャベツ栽培では、従来のセル成型苗を定植した場合に冬季の乾寒害を受け易く、枯死による欠株のほか、生育遅延により、著しい収穫時期の遅れが生ずることが認められている。セル成型苗を利用したキャベツ栽培において、生育の斉一性を高めるためにはスムーズに苗を活着させることが不可欠である。植え付け深さを深くすることによって生存率が向上することが春キャベツ栽培でも認められたが、機械定植を行う場合に植え付け深さを一定にするのは困難である。そこで、定植直後の培土が生育に及ぼす影響を明らかにする。

[成果内容]

1. キャベツセル成型苗定植直後の培土は、定植後に管理機により強く行い、畦の肩の部分に土を盛り上げ、畦の中央がやや低くなるように成型するものである。このことにより、株元に土を培土するとともに、風当たりを和らげて風によるゆれを低減する。
2. 秋まき春どりキャベツ栽培のセル成型苗の定植直後に培土を行うことにより、生存率が向上する(図1)。
3. 培土による生育日数及び球重への影響は無い(表2)。
4. 側枝の発生率は、深植えにより明らかに低下するが、培土による減少傾向も見られ、深植えと培土を組み合わせた区で最も低い(表3)。

[留意事項]

1. 定植後、風害を受ける前に速やかに培土する。
2. 苗の周囲を高くすることに意味があるので、短期間で崩れたら再度行う。
3. 追肥時の培土は別途必要である。

[普及対象地域]

秋まき春どりキャベツ栽培地帯

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

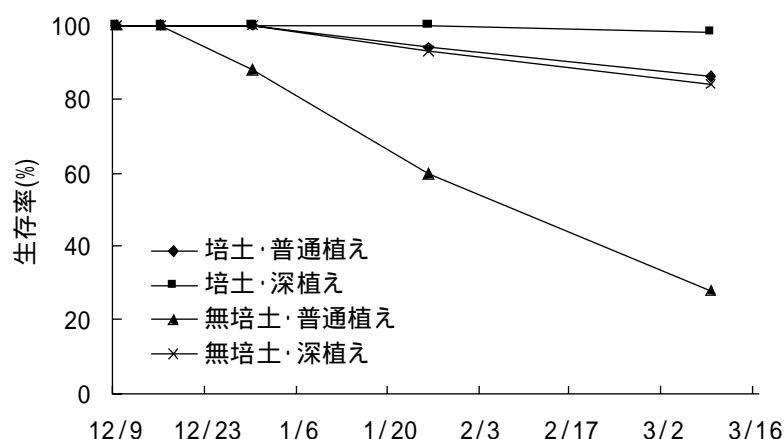


図1 定植直後の培土処理及び植え付け深さを異にするキャベツの生存率(2003年)

注) 品種: 金系201、播種: 10月28日、定植: 12月9日、畝間60cm 株間40cm。

表1 定植直後の培土処理および異なる植え付け深さがキャベツの生育日数および収量に及ぼす影響(2003年)

試験区	平均収穫日	地上部重 (g)	球重 (g)	球重比	収穫株率 (%)	10 a 収量 (t)
1. 培土・普通植え区	5月18日	2,424	1,386	57	68	3.94
2. 培土・深植え区	5月15日	2,214	1,455	66	80	4.79
3. 無培土・普通植え区	5月19日	2,704	1,464	54	28	1.73
4. 無培土・深植え区	5月15日	2,386	1,517	64	69	4.37

注) 球重比: 球重/地上部重 × 100。

表2 定植直後の培土処理および異なる植え付け深さがキャベツの生育に及ぼす影響(2003年)

試験区	球長径 (cm)	球短径 (cm)	球高 (cm)	外葉数 (枚)	側枝発生率 (%)
1. 培土・普通植え区	18.7	17.7	13.9	7.2ab	84b
2. 培土・深植え区	19.0	17.8	14.7	6.6a	26a
3. 無培土・普通植え区	18.8	18.0	14.6	7.6b	92b
4. 無培土・深植え区	19.3	18.1	15.0	6.6a	40a

注) 同一列上の異なる文字間には5%水準で有意差があることを示す。(Ryan法)

[発表及び関連文献]

- ・平成16年12月試験研究成果発表会(野菜)
- ・平成16年12月「都市近郊野菜産地における大苗を利用した春キャベツの省力機械化作業体系の確立」研究成果報告書

[その他]

先端技術等地域実用化研究促進事業「課題名: 都市近郊野菜産地における大苗を利用した春キャベツの省力機械化作業体系の確立」